

白門祭の 『祭覚』開花

おなじみの「白門祭」が11月2日から5日まで開催された。今年で34回目を数える白門祭だが、昨年、白門祭実行委員会が、唯一の主催団体として大学側に公認されたのを受け、今年度は「公認」第1回目という記念すべき年でもある。テーマは『祭覚』。「(白門祭の)主役である『学生』個々人の才覚が『祭』というフィルターを通して十分に発揮されるように」という願いが込められている。前半の2日間は、あいにくの天気でベテスの出店もできず、盛り上がりもいま一といったところだったが、好天に恵まれた後半2日間は、キャンパスに紅葉が映え、お祭り気分は最高潮に達した。白門祭の4日間を手分けしてのぞいてみた。

学生記者(木瀬恵子、玉井安子、竹尾智成、船橋智シデイキ、ムニブ、中村昌太郎、大谷秀之)



左から禹激=韓国代表、谷口晋也、田中雅美、中村真衣、源純夏、磯田順子(以上水泳)阿部慎之介(硬式野球)の各選手

五輪報告会 メダルは10円玉の味?!

白門祭のトップを切って11月2日シドニー五輪に出場した7選手(水泳6、硬式野球1)の報告会が開かれた。セントラル・プラザは、中大が生んだオリンピック選手を一目見ようと、雨にもかかわらず多くの学生が押し寄せた。選手が会場に姿を現すと拍手と歓声とともに、各選手を呼ぶ声が飛び交い、セントラル・プラザにこだました。式の最後に選手への質問タイムがあった。なかには「メダルの味は?」という質問に、「なめてはいないけど、10円玉の味らしいです」と答えると、質問者が「それじゃあ、後でなめてみま〜す」。会場はまた、笑いに包まれた。

大衆酒屋 ちえ

外の賑わいに疲れ「ちよつと、落ち着ける場所を」と思っていたら、あった、あった。まさにおあつらえ向きのお店が、5号館7階の「大衆酒屋ちえ」。ノレンをくぐると、かすり姿の女性2人が笑顔で迎えてく

れた。店内は60年代ふうの音楽が流れ、窓には障子、ススキも飾られている。

お品書きには、切り干し大根、肉ジャガ、イカの塩辛など豊富。これが百円ときている。各種ドリンクも、百〜五百円と格安。料理はもちろん、

皿だ記念日「ゴミのない白門祭を」

「環境サークルMt. EGO」が『皿だ記念日』と称して、ゴミのない学園祭を目指した。その名は「Dish Return Project」。食料容器ゴミを減らすために出店団体にプラスチック皿を使用してもらおう。使ったプラスチック皿は、デポジット制度で返却してもらい、このサークルと中大生協の責任で洗浄され、再び出店団体が使用できるというシステムである。皿の返却を可能にするこのデポジット制度は、商品購入時にお客さんからデポジット金を預かり、皿返却時にそれを返す。

出店団体には、Mt. EGOから皿を一枚50円で購入してもらい、客に対してデポジット金50円を上乗せ

店内の飾りもすべて2人の手作りとか。「ノレン作りに4時間もかかって……終わったら2人で分けます」。そういつて、手作りづくめの店を愛しそうに眺める彼女たちは、現在4年生。ことが最後の白門祭となる。

して販売してもらおう。客は白実委の協力により、Mt. EGOが設置した皿の回収所で皿を返却し、その時にデポジット金50円が返却される。3年前から始まったこのサークル



お皿を返すと「ハイ50円」

活動は、中大のゴミ・環境問題について考え、今回の企画もその一つ。白門祭のときに出るゴミが非常に多いことに着目したのがきっかけとなった。ゴミの量がどれくらいかは2年前から調査してきた。その結果、ゴミの約7割が食品容器のゴミであ



割りばしポスト

ることが分かった。プラスチック皿を使うこの制度は、他大学でもやっているところがある。

この制度を企画として実現するまでは大変だった。白実委および生協の協力なしでは成立しないため、春から交渉が続いた。自分たちが工夫してきけることを伝え、企画の効用を

にぎわうベテラ



訴えた。DRP(イベント名の略称)に参加した出店団体は、チラシや出店抽選会の時に、この企画を知ったという。DRPに参加すると、自分たちでチラシを用意する必要もないし、また、出店場所をDRP専用エリアに確保できる、というメリットがある。ただ、商品を販売するとき、百円の商品を百五十円で売らなければならず、客がこのシステムを理解しているだろうか、と不安を感じた。ある店では、五十円が客に戻るむねを店の前に書いて説明していた。

だが、プラスチック皿でも何ら不

いつもながら、白門祭の主舞台になるペDESTロリアンデッキの賑わい

便はない。あるスタッフは「他の大学でも同じようなことやっているけど、そこは自分たちで皿を洗わなくてはいけないから、その点ではこっちの方がラク」といつていた。

白門祭期間中、Mt. EGOが定期的にゴミ箱をチェック、捨てられてしまったプラスチック皿を回収したことで、皿の回収率はますます高まった。

今回、DRP作戦に参加したのは7団体だったが、これから先、参加団体が増えればMt. EGOのゴミ削減目標の達成も近いと思う。

一方、白門祭では3年前から、使い終わった割り箸を回収して、製紙

学生の熱意 タイ大使の心動かす

2日目の4日、タイ王国駐日大使のサクティップ・ブレイライク氏の講演会が8391教室で行われた。

この講演会は、商学部2年生の石畑涼馬君が中心となり、商学部の吉沢四郎教授、法学部の滝田賢治教授をはじめとする多くの先生方の協力で、実現されたものだった。

大使の講演会が行われることに



会社で再生紙にしてもらう「割り箸ポスト」を設置している。

なってきたきっかけは、石畑君がことし3月「教養演習（馬場政孝教授）のプログラムで、タイのチェンマイ大学を訪れたことに始まった。石畑君

は、この時の旅行でタイの素晴らしさを一人でも多くの学生に紹介できたらと考えるようになり、タイ大使館に事情を説明したところ、サクティップ大使が直接、学校で講演し

てくださることになった。学生の熱意が大使の心を動かしたのである。

大使の講演は「アジアの未来」というテーマで、英語で行われた。その際の通訳を滝田先生が引き受けてくださり、タイ・日間の関係や日本の若者に期待することなどの講演を約1時間にわたって行い、そのあと30分も質疑応答が行われた。

とくに大使は、日本の若者に対して「現代日本の若者は、問題を提起し、その問題点を見つめる際には批判的、かつ客観的な目を持つことが必要です。日本の過去、現在を客観



的に検討し、自信を持って未来を見据えてもらいたい。日本の若者は、遠い近いに関わらず、隣人に手を差し延べ、彼らを理解し、友情を深めてもらいたいと思います。また、現在の消費主義に満足することなく、他民族が受ける苦痛や迫害を知る都度、自分たちに何ができるかを自問すべきです」と語った。

また、タイの国内事情に話が及んだ。「タイ国内の問題点としては、教育と人材開発が大変遅れていることを認めなければなりません。この2つの分野は、持続可能な開発に



大使、中大生に熱烈メッセージ

とって不可欠です。金融危機を乗り切ったタイは、能力開発、技術開発、技術向上、そして経済自由化が起す影響に立ち向かう必要性、の4つを含む人材開発政策を、社会的セーフティーネットを強化することによって採用してきました。若者たち

が教育や技術開発を受ける権利を奪われたまま、タイの将来が双肩にかかることを期待されても、それは無理なことです」と、教育の重要性を強調していた。

最後に、私たちへのメッセージとして、「十分な教育を受けた日本の

若者には、果たすべき重要な役割があると思います。アジアの人々や文化を十分理解しつつ、東西世界の長所を結び付けることによって、今より素晴らしい日本を作り上げることができるといふ。世界的規模での平和と人間性の実現のために、アジア諸国と手を携えていけば、あすの日本は国際社会において、もっと適切な地位と素晴らしい役割を必ず与

小林建樹ライブ

注目のアーティスト・小林建樹ライブが4日、クレセントホールで行われた。繊細そうな顔立ち、温かみを感じさせる歌詞、ポップな感じの曲調から、聴き甲斐のあるバラードまで、幅の広さを感じさせる実力派シンガーである。

いよいよ観客の大歓声に導かれて小林建樹が登場。軽くユーモアのある挨拶で客席の空気を和ませると、さっそく、真夏の海にマッチしそうな「SPOON」で、一気にノリを挙げてくれた。「熱いカラダアーマ体温を」と、伸びのある声に、

えられるものとなるでしょう」と話された。

日本人であるがゆえに、見過ごしてきた日本の姿を、大使の講演で改めて考えさせられた学生も多かったのではないが。講演会の開催に協力した学生たちも「まさか大使に講演していただけるなんて、思ってもみなかったので、本当に感激です」と講演会の成功を喜び合っていた。

また大歓声。ピアノを長い指で弾きながら歌う、その姿はメチャ恰好いい。他には7曲目の「祈り」が印象に残った。歌詞も素晴らしく、ピアノの音のきれいさが印象に残る、メロディー感あふれる曲だった。

また、曲と曲の間には、ファンのために取って置き話もしてくれた。全1時間のライブは、あっという間に終わったが、会場を後にするどの顔も大満足の様子だった。

脳死を考え直す

「臓器移植と脳死―人の死を考える―」と題した講演会は3日、8号館で行われた。厚生省「臓器移植の社会資本整備に向けての研究」の分



キャンパス正面に飾られた五輪横断幕

担研究者である、町野朔先生（上智大教授）が招かれ、熱い論議が展開された。

先生はまず「平成9年10月に施行された臓器移植法により、脳死者から臓器提供が行われたのは、すでに9例を数える。しかし、私たちは、なにか当然のことのように思っていないいだろつか」と、疑問が投げかけた。さらに「古代からの文化・倫理的死の概念に科学的死が突然、進向することはない」と、社会資源の整備、論議の成熟化の必要性を強調した。

まだ20年しか、この世に生きていない私たちにとって、死とは遠い存在であるが、私たち自身の最も深い部分に関係している。もう一度「脳死について」、いや「身近なドナーカードについて」考え直してみてもいいがどうだろうか。

生命の世紀へ

いままでにない速度で進歩した20世紀——移動手段の発達、情報の発達、生活様式はガラリと変わった。便利さと豊かさ——われわれは何ん自由ない日々を送ることができる。

しかし、科学の進歩は幸福だけをもたらすものではなかった。差別、暴力、戦争——その影の部分のわれわれは忘れてはならない。

8号館の一室では、平和哲学研究会による、平和に関する自主制作ビデオの公開やパネル展示が行われた人々には生命を思いやる心がある。しかし、同時に悪も潜む。悪をなくするため、正義のため、自らの命を賭し

最先端技術 高校生に確実に届く

4回目を迎えた「中・高校生の科学実験教室」は、3日と5日の両日にわたって開かれ、すっかり理工学部イベントとして定着した。参加者は都合80人。昨年よりも一層充実しているようだった。

まず、伊理正夫先生（中大教授）の「科学技術を支える数学・理科」の講演で始まった。先生は10進法や60進法といった数の数え方や、数え歳と満年齢の違いを説明、「世紀を数える場合、0世紀がない」といった、興味深い話をされた。理科分野では「常に好奇心を持つことが大切。なぜ？」を忘れないように」と、

立ち上がった多くの偉人たちが。それでもまだ、この世界には問題が山積みだ。それらはすべて、これから21世紀を歩んでいく、われわれ一人ひとりの選択にかかっている。

20世紀に別れを告げる前に、この世紀の果たした進歩、犯した罪を振り返り、そして新世紀をどう切り開いていくかを考える機会を与えられた。

メッセージを送った。その後、司会役の築山修治先生（同）が「伊理先生はどうして数学が好きになったんですか」と質問すると、「私は数学の先生が教える数学は好きではなかった。しかし、常に好奇心を持って物理などと関連させて、考えているうちに自然に好きになっていった」と答え、生徒たちは「ウーン」。

次は、岩尾徹先生（中大理工学研究所）の「火の玉でゴミ退治」の話。太陽や雷などのような大きなエネルギーを持つ火の玉（プラズマ）を、電気に利用して作り出し、廃棄物処理に適用することは非常に有用であ

ると説明。例として、従来はゴミ焼却場では有害な焼却飛灰が出てしまい、そのまま埋め立てても危険性が残る。しかし、摂氏約1万度という超高温プラズマで処理すると、無害化されたガラス状の固形物ができ、リサイクルへの活用が可能となり、すでに一部の道路で再利用されている。

岩尾先生の「僕たちの世代が出したゴミは、僕たちの世代で解決しよう」という呼びかけが力強く響いた。午後からは田口東先生(同)の「高層ビルとエレベーター」の話。ここでは、高層ビルにおけるエレベーターの面積を見学者側がはじくことになり、苦戦する学生記者をよそに、彼らは難なく解いていた。

いよいよハイテク棟1階のプラズマを実際に見ることになる。プラズマを見た生徒たちは、「ワーツ、きれい」という声を上げ、岩尾先生から発生の過程の説明を受け、固形化した土が生徒にプレゼントされた。

電磁波の説明を行ったのは、白井宏先生(同)。電磁波は家電製品や航空無線など、さまざまな分野で活用されているが、目的以外の不要な

電磁波も発生してしまう。そこで白井先生は、電磁波吸収体で覆われている実験室で、携帯電話が利用できないことを実演し、不要な電波を吸収することを証明した。

一方、担当の先生を取り囲んで説明を求めていたのは、人間機械協調システム研究室。中大が開発に参加している惑星探査車ローバの説明やロボットの展示、これを遠隔操作するテレオペレーションの実演などがあつた。

「教室」が終わったあと、築山先



集積回路を顕微鏡をのぞく

生と牧野光則先生(同助教)に感想をうかがってみた。「体験の際、生徒たちがイキイキしていた。非常に好印象だった」と、お2人も意見は一致。

また、「文部省のバックアップにより、ビデオやCD-ROMの作成など、新たなアプローチが可能になった」と話してくださった。

アンケートによる生徒たちの感想も良好だった。彼らに最先端技術の面白さは、確実に伝わったようだ。



プラズマ発生過程をモニターで説明

白門祭前の 学生部行事

お酒シンポ

良好な友人
関係あれば
一気飲みの
問題起きず

大学生の酒の一気飲みが社会問題化しているが、酒に関する問題を改めて考えようというシンポジウムが10月19日、文学部棟で開かれた。これは白門祭に先駆け、学生部が白門祭実行委員会の協賛で行った。

タイトルは「大学生とお酒―祭に酒はつきものか」。パネラーには過去3年間、白門祭前夜に体調が悪くなった学生のために、中大に來られている和田先生(日本医科大学付属永山病院)、弁護士資格を持つ伊達先生(法学部兼任講師)。それに中大側から小林先生(総合政策学部教授)と都筑先生(文学部教授)

も発言者に加わった。

司会の園田先生(文学部教授)は、第1ラウンドとして、パネラーとして出席された方に、現在に至るまでのお酒との付き合い方を尋ねた。やはり、どの先生も学生時代は無茶な飲み方をされたようで、現在では酒とは「良い関係」にあるそうだ。第2ラウンドのテーマは、酒にかかわる問題の現状と、それに対する提案。

和田先生は、泥酔学生状況を「なにか起きてもおかしくない」と報告。「一気飲みなどを他人に強制するこ

とはやめよう」と会場に向かって呼びかけた。

伊達先生も「一気飲みの強制は、傷害罪として立派に成立する」と発言。将来はアルコール・ハラスメントという形で訴えられるケースもあり得る、といわれた。

これらの発言を受け、「大胆な政策提言」をしたのは小林先生。どうせ一気飲みなどで泥酔者が出るのなら、いっそのこと「一気飲みコーナー」を作ってしまったらと提案。

「あらかじめコーナーに和田先生



雨天吹き飛ばせ——チアリーダー



熱っぽいながら健彦のステージ

も待機してもらえば、アフターケアも万全だ」という、一気飲みの取り締まりも兼ねた良案?に、会場はどよめいた。また、小林先生は、各自が自分の酒量を把握しておくべきだとも話された。都筑先生は酒を通して盛り上がっている空気を心理学用語で「同調」という言葉で表現。こういう雰囲気のおかげで、「無茶な飲み方はやめよう。」といえる勇気を持つと発言された。

最終ラウンドとして、これまでの

.....ながら健彦..... 心に染みたコンサート

「中央大学コンサート2000ながら健彦」(学生部主催)が10月27日、クレセントホールで行われた。地域に根ざした企画という狙いで開かれただけに、700人のうちの半分は一般客。「下町のおやじが多摩にやって来る」という前宣伝は十分効果目があったようだ。

ながら氏がステージに登場早々、「元々の本業は、このとつり歌手なんだけど、ドラマやラジオでの活躍がほとんどなんだよね」というと、会場はドツと湧く。しかし、いざ歌

ディスクッションを踏まえ、いよいよ、大学生の「酒との上手な付き合い方」について話し合われた。各先生は人間関係の大切さを強調。日頃から友だちと酒を飲み、語り合う場を増やすべきだと提案。良好な友人関係があれば、一気飲みなどの問題は起きないとの結論で一致した。

パネルディスクッションを企画した学生課の方は「今回の試みを、学生の皆さんが酒と良い関係を築くため、きっかけにしてほしい」といわれた。

い出すと、華麗な歌声とギターさばきは、さすがプロ。「お酒とのおいしい付き合い方をあなたに」というテーマで、「飲酒」についての話を歌の間に挟んで語ってくれた。

ながら氏は、学校祭などでの一気飲みを痛烈に批判し、「酒自身も喜ばない」。さらには、若者と酒について、「酒は魔物」と言っていたのが印象的だった。

クレセントホールは完全に「ながら氏の世界」と化し、心に染みるフォークソングを堪能した。